



Title	第四章 デザインミュージアム
Author(s)	高安, 啓介
Citation	a+a 美学研究. 2017, 11, p. 145-147
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90142
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第四章

デザインミュージアム

デザインの資料収集

デザインの調査研究

デザインの企画展示

デザインの啓発活動

デザインミュージアムは、以上の四つの要件すべてを満たしてこそ十全なミュージアムと言えるだろう。四つすべてを満たしてはいない近似した場はさまざまに見られるが、四つすべてを満たしている機関はかぎられる。デザインミュージアムは、歴史資料を展示する博物館の性格と、美術作品を展示する美術館の性格と、両側面をそなえているので、日本語ではミュージアムと呼ばれるのだろう。デザインミュージアムの最終目的をとくに啓発活動にみるとときには、四つの役割がさらに考えられる。第一に、デザインミュージアムは、産業を育成する場である。新しい考えを紹介することで新しい産業をうながす場となりうる。第二に、デザインミュージアムは、デザイナーを育成する場である。ものづくりをこころざす学生や、ものづくりにかわる人々が、歴史への理解を深めたり、最新の取り組みに触れたり、分野を超えた交流を深めたりと、学校教育をおぎなう学びの場となる。第三に、デザインミュージアムは、消費者を育成する場である。開発の現場や、生産の現場や、流通の現場や、他国の状況など、消費者に見えにくい部分にこそ光をあてて、良い商品を見抜くための情報をあたえる場となる。第四に、デザインミュージアムは、生活文化を育成する場である。デザインがたんに商品売るなどの目的のための手段ではなく、創意工夫そのものに人々が喜びをおぼえる場となる。

日本にはまだデザインミュージアムがないのだろうか。少なくともまだ英国のヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムのような大規模かつデザインに特化したミュー

ジアムはないかもしれない。二〇一二年の三宅一生らの「国立デザイン美術館」への呼びかけもそれを待望する動きの一つであった。しかしこのように日本のデザインミュージアムの未来について考えるのならば、新しい箱物をもとめるまえに、既存の施設がこれまで果たしてきた役割について反省し、既存の施設がいかに新しい時代の要求に応じるのか、既存の施設どうしがいかに連携をとることが可能かをまず考えたい。これこそデザイン研究者の仕事である。

日本においてデザインミュージアムに近似する機関はいろいろ存在した。国立の施設というならば、東京国立近代美術館ならびに京都国立近代美術館はすでに近代工芸とデザインについて上記の四つの機能をかなり果たしていた。これら以外でも、日本の美術館はもとより厳格にファイナートだけ取り扱っていたわけではない。民芸館のような工芸博物館もまた数多くみられる。デザインミュージアムに向けて新しい動きもあった。日本インダストリアルデザイナー協会は一九九七年に信州新町に「デザインミュージアム」の名をかかげる施設をひらいた。二〇〇七年に開設した21_21 DESIGN SIGHTはこれまで面白い企画展示をおこなっている。しかしこれら以外でも、デザインセンターなどよばれる地域産業の振興のための施設もまたデザイン啓発活動にかかわってきた。企業のショールームの役割についても新しい関心から見直されてよい。

(高安啓介)

参考文献

- 藤田治彦『ワイトラ・デザイン・ミュージアム』『美術フォーラム21』二号、一九九九年、一四八―一五五頁。
藤田治彦『ロンドンのデザイン・ミュージアム』『美術フォーラム21』二号、二〇〇〇年、一三九―一四六頁。